

「恰好」から「かっこいい」へ—適合性 *suitability* の感性化

春木有亮

From Kakkou To Kakkoi: Aestheticization of suitability

Summary

The Japanese word Kakkoi, used mostly by children and teenagers, was a buzzword in the 1960s and then became a common word during the 1990s. This word, as well as Kawaii, has created its own field of culture and of aesthetics. However, there is no analytic argument which shows the connotation of Kakkoi culture. This article treats the Japanese notion of Kakkoi as an “aesthetic quality”.

Kakkou, a part of the origins of the word Kakkoi, was imported from China and used as an adjective verb and as a verb, at the latest, in the 15th century and as a noun in the 16th century. With such a syntactic change, the meaning of the word Kakkou varied from “to suit” itself to the state of a thing which is suited to another thing, or to the normative state of a thing. From the end of the 16th century to the 18th century, Kakkou came to mean the appearance of a thing which vaguely implies suitability, or of a thing no longer suitable. After the 18th century, the expression “Kakkou ga yoi/warui(Kakkou is good/bad)” frequently appeared in writing.

In the newer senses of the word Kakkou, the suitability which it signifies has been internalized for a thing, especially for the appearance of a thing. The suitability has become independent of Kakkou with its alternative, the positivity/the negativity and has been transferred to (the subject of) the judgement: “yoi/warui”. This author proposes that this visualization and this subjectification of the suitability in the history from Kakkou to Kakkou ga yoi are the “aestheticization” of the suitability.

Kakkoi, an adjectification of the phrase: “Kakkou ga yoi” became an educational issue in the 1960s. It was “a physical, sensual and visual

value” in perceiving “sensitively” the “form” and the “figure” as “appearance” of a thing in the context of the time when the “visual cultures” as “photo, manga, television and advertisement” were developing (Tadao SATO, 1964, and others). The use of the word Kakkoi was guilty of giving priority to the “appearance” and of decreasing the value of the “substance”. However that is a way of life where “they construct the reality by imagination, going against the modern way of cognition, which attaches importance to the essence abstracted from the reality” (Jiro SAITO, 1979). When “Kakko (カッコ) is not Kakkou (appearance) (格好) itself but the whole object including the essence expressed in the appearance of a thing”, we can start with a judgement of Kakkoi and create the “reality” from the “appearance” (SAITO, 1979) to get the suitability of a thing.

If this “paradoxical” structure makes the situation where the norm of the suitability which exists on the side of (the subject of) the judgment is brought back again by imagination to the side of the thing, we can add Kakkoi to the same line of “aestheticization” of the suitability from Kakkou to “Kakkou ga yoi”.

はじめに

本論の目的は、「かっこいい (「カッコイイ」、「カッコいい」などを含む。以下、同様。)」を、美学の見地から論究することである。これまで、「かわいい」に対しては、それが「高度成長期の昭和 40 年代に端を発し、平成にいたるまでの現代日本社会が可能にした独特の文化現象」¹であり、「今やこの言葉を抜きにしては日常生活が円滑に営めないほど、日本社会における万能の日本語 (大衆語) になってしまった」²という見かたをおおむね前提とし、いくつかの文化的考察がなされ、哲学的、あるいは美学的なアプローチ³も試みられた。と

¹ 増淵宗一『かわいい症候群』NHK 出版 1994 年 p. 18

² 増淵宗一『かわいい症候群』NHK 出版 1994 年 p. 12

³ たとえば、篠原資明「かわいいの構造」(『あいだ／生成』京都大学 2012 年)、春木有亮「「カワイイは、つくれる」か-現代日本の美のイデオロギー」(『北海道芸術論評』第 7 号 北海道芸術学会 2015 年)、『幼さという戦略 「かわいい」と成熟の物語作法』(朝日選書 朝日新聞

りわけ 1960 年代に「若者ことば」、「子どもことば」という位置づけで普及した「かっこいい」もまた、「かわいい」と同様に、高度成長期以来現在にいたるまで、その語の流通とともに、固有の文化領域、感性領域を切り開いてきたと言える。しかしながら、「かっこいい」の内実を問う分析的な論考は、これまでほとんどない。

本論は、「かっこいい」に対するおそらくはじめての学究的なアプローチであるが、それが美学的たるゆえんは、本論が、「かっこいい」を一つの「感性的質」であるとみなしたうえで、その特質の一端を明らかにせんとするところにある。本論で言う「感性的質」は、津上英輔が『あじわいの構造』(2010年)で言うそれに依拠している。すなわち、「感性的質」とは、「S は P である」という命題が感性的判断に基づいているとき、述部を成す一定の名辞 (P) は、一定の「感性的概念」に対応するが、そうした感性的概念のうちで、対象の性質であるもの、である⁴。津上によれば、「感性とは、目や耳などの諸感覚器官と想像力とを使って感じ取る働きであり、知性や意志と並ぶ精神の働きのひとつである」⁵。「感性的」とは、「感性を働かせれば働かせるほど、よりよくとらえられる」⁶という意味である⁷。たほうで、感性をはたらかせるほど、よりよくとらえられる対象は、感性的な対象である。津上は同書で、とりわけ「感性化」、すなわち、「感性的でなかったもの(対象)または目(主体によるとらえかた)が、感性的になること」を論究する。それは、たとえば、「なつかしい」、*nostalgia* とい

出版社 2015年)がある。

⁴ 津上は、自らの「感性的質」を、「感性的概念」、「感性的範疇」との差異を際立たせることによって規定する(津上英輔『あじわいの構造 感性化時代の美学』春秋社 2010年 pp. 60-65)。「感性的概念」と「感性的質」のちがいにかんしては、「感性的概念」が、「無関心性」や「芸術感/自然感」(大西克禮)のような、感性の働きに関する概念をも包括するのに対して、感性的質は、もっぱら感性がとらえる対象の性質を表すと言う。また、「感性的範疇」と「感性的質」のちがいにかんしては、「感性的範疇」が、「美を特権的なものとして中心に据えることを必須の前提としている」一つの固定された「体系」を成すのに対して、「感性的質」は、美を特権化せず、また、もろもろの質、ならびに質同士の関係が、たえず生成し、更新され、流動することを前提とすると言う。さらに、感性的質のそうした流動の構造を、シブリー、バッドの「比喩」の理論の先に見据えながら、解明せんとするのが津上の目論見である(津上英輔『あじわいの構造 感性化時代の美学』春秋社 2010年 pp. 66-67)。

⁵ 津上英輔『あじわいの構造 感性化時代の美学』春秋社 2010年 p. 13

⁶ 津上英輔『あじわいの構造 感性化時代の美学』春秋社 2010年 p. 61

⁷ あるいは、「意識的に深まりを追求することのできる」(『あじわいの構造 感性化時代の美学』春秋社 2010年 p. 61)を意味するとも言われる。よりくわしくは、『あじわいの構造 感性化時代の美学』p. 13、p. 61を参照していただきたい。

うことばの「感性化」の様相と構造を解明することによって、である。ことばの用いかたは、われわれのものにとらえかたに直結しているゆえに、ことばの感性化を語ることは、主体によるものにとらえかたの感性化を語ることであり、というわけだ。

本論もまた、こうしたスタンスに則って、「かっこう（恰好、格好）」から「かっこいい」の変遷のなかに、ことばの感性化のありようをさぐる。

第1章では、「かっこいい」の語源の一部である「恰好」の語誌を、おもに15世紀なかばから18世紀の用例をもとに、描き出す。そのさい、「恰好」の第一の内包である「適合（性）」に着目し、その内実を分析しつつ、「恰好」から「恰好がよい（／悪い）」に至ることばの感性化（の進展）を指摘すると同時に、「恰好」という語自体の非感性化（脱感性化）を指摘する。

第2章では、第1章において「恰好」にかんしてなすのと同様のしかたで、「かっこいい」の語誌を記述、分析することにくわえ、1960年代以降の、「かっこいい」に対する批評を参照しながら、「かっこいい」の意味をさぐりつつ、第1章でみた「恰好」から「恰好がよい（／悪い）」に至る感性化（の進展）の延長線上に「かっこいい」の成立を位置づける。

第1章 「^{あたかもよし}恰好」から「恰好がよい」へ

第1節 漢籍から国書へ

「かっこいい」の語源の一部である「恰好」⁸は漢語であり、「あたかもよし」

⁸ 注34に挙げた辞典のいくつかは、「かっこいい」の直接の語源が、「かっこう（恰好、格好）」と「よい（好い、良い）」という二つの語であることを記述するが、そのことはかならずしも自明であるというわけではない。たとえば、「かっこいい」は、「かっこい」であり、「賢い」から来しているとする見解がある（武智鉄二「かっこい奴」『東京新聞』1964年5月7日朝刊3面）。しかしながら、辞典、辞書をはじめ、「かっこいい」が、「かっこう（恰好、格好）」と「よい（好い、良い）」から成るとする見解が優勢であること、また、じっさいの語源がどうであるかは別に、優勢である見解がもたらす語源のイメージ（とくに、漢字表記による意味の喚起）が、「かっこいい」の内包に実質上影響することを顧慮して、「かっこいい」が、「かっこう（恰好、格好）」と「よい（好い、良い）」という二つのことばが複合してできたと仮定したうえで、その意味を論究する。

また、「かっこう」には、本論末尾の「参考にした辞典、辞書」に挙げた現代語辞典すべてが、「恰好」と「格好」の二種類の漢字表記をあてている。『広辞苑』第六版（2008年）は、「恰好」を正式の表記とし、「格好」をサブの表記に挙げている。『学研国語大辞典』第二版（1990年）は、「恰好」は古い表記であるとし、「格好」は代用字とする。本論末尾の「参考にした辞典、辞書」に挙げた古語辞典には、「格好」は載っておらず、総じて、「恰好」と「格好」の二つの現代語表記のうちでは、「恰好」がより古い表記であると考えてよい。

と書き下し、注⁹に挙げたいいくつかの辞典は、第一義の項で、ある種の適合性を

⁹ 辞典における「かっこう」の記述（用例は省いた。）

かっ-こう【恰好】（「格好」とも書く）

① 適当なこと。似合わしいこと。ころあいであること。特に、価格が手ごろなこと。

② その年頃であること。その年頃に見えること。

③ すがた。身なり。

④ 物事の状態・様子。

⑤ 整った形。まとまり。ていさい。

一が付く 内容は不十分でも、その名に値する形だけではできる。体裁が整う。

（『広辞苑』第六版 岩波書店 2008年）

かっ-こう [: カウ]【恰好・格好】（「こうこう（かふかう＝恰好）」の変化した語。「恰」はあたかも、ちょうどの意）

【一】〔名〕

(1) (形動) (一する) 基準、標準と合うこと。ちょうど合うこと。ふさわしいこと。また、そのさま。かっこ。

(2) (形動) 値段がちょうど手ごろであること。安いこと。また、そのさま。かっこ。

(3) (形がちょうどよいというところから) 姿、形、様子。見かけ。かっこ。

(4) そのようにはたから見える状態。様子。

(5) 体裁。体面。かっこ。

【二】〔語素〕（「がっこう」とも。「年（とし）かっこう」の形、また、上に年齢を表わす数を伴って用いられる）姿、様子などがその年齢にふさわしく、ちょうど合っていること。ちょうどその年齢くらいであること。およそその年齢であること。かっこ。

（『日本国語大辞典』第二版 小学館 2001年）

かつかう【恰好【恰合】漢語。正確な字音に従えば、「かふかう」であるが、通常「かつかう」の形で用いられる。『碧巖録』や『朱子類語』に用いられていて、鎌倉時代以降に入ってきた語。

「恰合カツカウ」〔易林本節用〕

一 名詞・動サ変 思うところとびたりと適合すること。ちょうどころあいであること。相応すること。

二 名詞・形容動詞ナリ ちょうどごろであるさま。適当であるさま。

三 名詞

① 見た目につる姿形。そのものにふさわしい外観。「よし」「悪し」などを伴って用いることが多い。

② 体裁・外聞

（『角川古語大辞典』初版 角川書店 1982年）

かっ-こう【格好・恰好】.. コウ [名・自サ変・形動ナリ活]

① 適当なこと。似つかわしいこと。ころあいなこと。

② (形が適当なことから) 姿。形。

③ 値段がちょうどいいこと。

語誌：この語は、本来、「恰恰（かふかふ）」を、コレモカレモと訓むところから、いずれもよく整う意に用い、「恰恰（かつかふ）」の熟語が生じ、後に、意味の変化につれて「恰合」「恰好」「格好」などとも書かれるようになったものと思われる。

（『古語大辞典』第一版 小学館 1980年）

表すとする。「恰」は、「心を用いる」という原義をもち、唐時代に現れ¹⁰、第一義に「「ねんごろ」、第二義に「あたかも、ちょうど、適当」を意味する¹¹。「あたかもよし」の「あたかも」は、「當る」の語根の「あた」、副詞形の語尾である「か」、助詞の「も」から成り、「まさしく似ている状態」を表す¹²。たほうで、「好」は、「美しい」、「よい」、「親しい」、「愛好する」、などを意味する¹³。したがって、字義を総合すれば、「恰好」は、ある事物が別の事物と、親しく、似ている状態を、美しく、好ましく感じること、あるいは、美しく、好ましく感じられるしかたで、ある事物が別の事物と親しくあり、似ている状態、ととらえうる¹⁴。ここでは、字義上、「恰好」が表す適合性の根底には、諸事物のあいだの親近性、類似性、があることを確認しておきたい。

中国語の「恰好」の最も古い用例の一つは、白居易の詩『勉閑遊（閑遊に勉む）』（824年）（古文 1¹⁵）に見つけられる。『白氏文集』が、「平安時代・承和年間（834-848年）以降に日本へ伝来」¹⁶したことに鑑みれば、すでに、平安時代（800年代）には、「恰好」が、熟語ととらえられていたかどうかはともかく、そうした字の並びというかたちで、日本に伝来していたと考えうる¹⁷。ひき続き 12 世紀以降、『碧巖録』（1125年）、『朱子語類』（楠本本）（1270年）

¹⁰ 「恰（こう）は六朝以前の書にみえず、唐以後に俗語的に用いられる。〔遊仙窟〕に「心肝恰もくだけんと欲す」とあり、これらの書によって、わが国に紹介されたものであろう。」（『新訂字訓』初版 平凡社 2005年）

「唐詩などにいたってはじめてみえ、適当というほどの意に用い」（『字通』初版 1996年）

¹¹ 「恰」の原義である「心を用いる」ことから「あたかも、ちょうど、適当」への転化は、たとえば、心を用い合い、心を尽くし合う、懇親の関係にある人間が、ぴったりと重なるように似るという点で、親しさを軸とすると考えうる。

¹² 『新訂字訓』初版 平凡社 2005年を参照。

¹³ 『大漢和辞典』第四巻 第二版（大修館書店 2001年）、『新訂字統』初版（平凡社 2004年）、『字通』初版（平凡社 1996年）を参照。

¹⁴ 小野正弘「漢語「恰好」の受容とその変容—中立的意味とプラスの意味の共存—」（『伝統と変容』日本文芸研究会編 2000年）では、「恰好」が漢語という位置づけで日本に入ってきたころの「恰好」の意味を、「《あるものとあるものがうまく調和する・対応する》」とし、おそらく「好」の意味を、「うまく」と副詞に託す。

¹⁵ 本論文末尾に、「恰好」の語の使用例文が載る古文文献資料のリストを付した。以下本論文では、文字の右肩に付した数字による脚注の指示とは別に、「（古文+数字）」のかたちで、古文文献資料の指示を挿入した。「（古文+数字）」の数字は、古文文献資料上の数字と対応する。

¹⁶ 岡村繁『新釈漢文大系』105 明治書院 2014年

¹⁷ 『角川古語大辞典』初版（1982年）には、1125年成立の『碧巖録』や1270年成立の『朱子語類』に用いられており、遅くとも鎌倉時代以降に日本に入ってきたとある。

といった漢籍において登場するが、国書¹⁸のなかで「恰好」が用いられた最も古い時期の例は、『杜詩統翠抄』（1443年）（古文4）、『蔭涼軒日録』（1462年）（古文5）にある。これらでは、「恰好なり」という形容動詞¹⁹で、用いられる。それにつぐ、『足利本人天眼目抄』（1471-73年）（古文6）においては、「恰好す」という動詞で用いられる。「恰好なり」、「恰好す」が、「恰好」が漢籍から国書へ移植された結果であるにとらえるならば、国書における「恰好」の使用の起点は、遅くとも15世紀後半にあると考えうる²⁰。

¹⁸ ここでは「国書」を、漢籍、仏典、洋書をのぞく、日本で書かれた本、とする。

¹⁹ 古語において形容動詞の存在を認めない場合は、「恰好なり」を、助動詞が後続する名詞、にとらえる。

²⁰ 小野正弘（「漢語「恰好」の受容とその変容—中立的意味とプラスの意味の共存—」（『伝統と変容』日本文芸研究会編 2000年）は、「南北朝時代以後、禅宗を媒介として漢語の更新が行われた」という佐藤喜代治（『五燈会元』の語彙の考察—わが国の近代の漢語との関連において—（『国語学研究』（1974年）所収）の意見を踏まえつつ、「禅宗の僧侶たちが新たに受容した漢語のなかに「恰好」があったことから、それが抄物においても使用されたということになる」と考察する。

また、「恰合」の「恰好」とのかかわりを指摘しておきたい。まずは、『角川古語大辞典』は、おそらく同音語、同義語の位置づけで、『易林本節用集』から「恰合 カツカフ」の語を挙げている。同辞典には、「恰合」の見出し語はないが、『日本国語大辞典』は、「恰好」と区別して、下記のとおり、「恰合（こうごう）」を見出し語に載せている。

こう - ごう [カフガフ] 【恰合】 [名] 釣合いがとれてうまく合うこと。* 古文真宝桂林抄 [一四八五（文明一七）頃] 上「今日は此の四美具りさて恰合した」* 京大二十冊本毛詩抄 [一五三五（天文四）頃] 七「帯も冠も其人の徳によく恰合して似合たぞ」【辞書】黒本【表記】【恰好・恰合】黒本（『日本国語大辞典』第二版 小学館 2001年）

また、ブログ『情報言語学研究室』（<https://catchcopy.make1.jp> (2018/10/8 アクセス)）は、『節用集』と『下學集』などのいくつかの版を調べ、同ブログが参照する辞典のうちで最も古い1444年成立の『下學集』が、「恰合」のみを記載すること、1474年成立の辞書、広本『節用集』（雑書類書）をはじめいくつかの辞典が、見出し語に「恰好（カツカウ）」を記載し、「恰合」を別の表記のしかたであるとする、かつ、ぎゃくに、16世紀なかば以降の『運歩色葉集』が、見出し語に「恰合（カツカウ）」を記載し、「恰好」を別の表記のしかたであることから、日本語において「恰合」が「恰好」より先に流通してのち、「合」の代わりに「好」をあて、そのさいに、漢籍資料にある「恰好（あたかもよし）」を熟語化したとするが、その結論は推定にとどまる。しかしながら、二つのことを確実に言いうる。一つに、遅くとも15世紀には、「恰好」と「恰合」が、漢字表記上オルタナティブであったこと、二つに、両表記に、通時的に一貫して主副の関係があるというわけではないということ、である。

注目すべきは、注9にも記載した、『古語大辞典』（小学館 1980年）の見出し語「恰好」の「語誌」欄の記述で、「この語は、本来、「洽恰（かふかふ）」を、コレモカレモと訓むところから、いずれもよく整う意に用い、「洽恰（かつかふ）」の熟語が生じ、後に、意味の変化につれて「恰合（かつかふ、あるいは、かつがふ*かつこ、およびかつこ内は春木が挿入した。）」「恰好」「格好」などとも書かれるようになったものと思われる。」とある。ただ、「洽恰（かふかふ）」から「洽恰（かつかふ）」への熟語化と読みの変化、「洽恰（かつかふ）」から「恰合」への変化を跡づける文献資料はなく、これも推定にとどまる。

「洽恰」は、「恰好」が載る最古の本である『白氏文集』に、載る。

〔呉櫻桃〕

第2節 「恰好」の名詞化と適合の多元化—水平方向の適合と垂直方向の適合

前述の『勉閑遊（閑遊に勉む）』（824年）（古文1）からの引用文中、「貧窮心苦多無興。富貴身忙不自由。唯有分司官恰好。閑遊雖老未能休。（貧乏生活に喘いでいると、精神的に苦しくて興覚えることも滅多に無く、富貴の身分でいると、多忙のために身の束縛を受けて遊びに出かける自由がない。ただ東都分司の官職だけはちょうど中庸を得ていて、年老いたとはいえ、ゆったりとした春の遠出を未だに止められないでいる。21）」では、「恰好」は、「分司官」という職業が、詩人が思い描く職業の理想にぴったりとあてはまることを意味する。『碧巖録』（1125年）の引用文中、「他一句中須具三句、函蓋乾坤句・隨波逐浪句・截断衆流句、自然恰好。（彼の一句には三句が備わっているはずだ。天地をおおいこむ句、波に従いたゆたう句、様々な流れを断ち切る句で、自ずとぴったりはまっているのだ。22）」では、「恰好」は、句同士が適合した状態を意味する。『朱子語類』（楠本本）（1270年）（古文3）の用例では、「恰好」は、あるもの（たとえば、「盥盤」）とそのものに付された銘との適合を意味する²³。

含桃最説_レ出_二東吳_一

香色鮮穠氣味殊

洽恰擧_レ頭千萬顆

婆娑拂_レ面兩三株

鳥偷飛處街_二將火_一

（『白氏文集』第54巻 吳櫻桃詩（詩2471番）（824年））

ここでは、「洽恰」は、『新釈漢文大系』106 白氏文集 十（明治書院 2014年）が注記するように、「込み合うさま。密集して衆多なるさま。」という意味である。「洽」は、「洽（あまねく水がゆきわたる）（『新訂字統』初版（2004年）、『字通』初版（1996年））」という意味であり、「恰」とあわせて、おそらく、水がゆきわたるようにあまねく、多くのものが、ぴったりとひつついたかたちで在ることを表すと考える。

両者のどちらが先かは不明であるが、「恰好」は、常用漢字においては「格好」にとってかわられながらも、現在にいたるまで命脈を保っているのに対して、「恰合」は、1716年の『葉隠』の用例、「不恰合の時は、直り候迄は、幾度も云直し仕直し候様に成され候」をさいごに、用例が見つからない。字義上は、「恰好」は、ぴったりとあてはまることを好ましく感じる主体を据えるのに対して、「恰合」は、ぴったりとあてはまることという客体の性質を「合」ということばで反復する強意表現であるにとらえることができるであろう。もし18世紀以降に「恰合」が「恰好」にとって代わられていったのだとしたら、それは、後に見るように、「恰好」の使用にさいして、対象の性質から主体の感情へとアクセントが移行する傾向の兆候の一つとみなしうる。

²¹ 岡村繁『新釈漢文大系』106 白氏文集 十 明治書院 2014年

²² 末木文美士『現代語訳 碧眼録』上 岩波書店 2001年

²³ 白井順ほか『朱子語類』訳注 卷八十七～八十八 汲古書院 2015年、を参照。ただし、古

国書における「恰好」の16世紀前半までの用例の多くにおいては、先に見た漢語の用例と同様に、「恰好」は、ある事物Aが、事物Bに適合する行為、あるいは、事態を指示する。そのさいに、助詞の「に」、あるいは助詞の「と」によって適合の対象を導く。たとえば、『毛詩抄』(1535年)(古文20)の「帯モ冠モ其人の徳ニヨク恰好^{シテ}メ似合タリ」が典型に挙げられる。

また、16世紀前半までのほぼすべての用例において、諸事物が適合すること自体だけではなく、適合した結果である諸事物の状態が、肯定的にとらえられる。このことは、先に見たように、「恰好」に「好」という肯定的な意味をもつ語が含まれていることに即していると言える。たとえば、『古文真宝彦龍抄』(1490年ごろ)(古文11)、『毛詩抄』(1535年ごろ)(古文18、19、20)において、徳の高い人が立派な服を着る状態は、それ自体がよい。また、先に見た『足利本人天眼目抄』(1471-73年)(古文6)は、「父」と「子」、「上」と「下」、「体」と「用」の適合を語り、『文明本人天眼目抄』(1400年代なかばごろ)(古文7)は、「器」と「入れ物(中身*かっことかっこ内は春木が挿入した。)」の適合を語るが、そのことを通して、いわば宗教的な理想状態を語る。裏から言えば、たとえば、『三体詩幻雲抄』(1527年)(古文11)が「恰好せまい」、『中華若木詩抄』(1533年)(古文14)が「不恰好」を用いて、適合しないことを語るさいのように、適合しない状態は、(統語論上のみならず、意味論上)否定的にとらえられる。

こうした傾向は、以下のことを示す。事物Aが事物Bに適合するとき、ひとまず、事物Aが事物Bという規範に適合しているか、事物Aと事物Bの関係のありかたが、関係の一定のありかたを規定する規範に適合している。そのうえで、この適合の行為を「恰好す」と呼び、この適合の事態を「恰好なり」と呼ぶためには、適合の行為そのもの、あるいは事態そのものが、肯定に値するべく、なんらかの行為の規範、事態の規範に適合していなくてはならない。

こうした規範は、ある適合が「恰好」と呼びうる適合にかなうかどうかをはかる規範、適合の適合をはかる規範と呼びうる。ただし、この「恰好」のいわばメタ規範に対して、事物Aの事物Bへの適合が適合した結果、「恰好」が成立する、という言いかたは、論理上の説明であり、現実のうえではむしろ、「恰好」が成立している事態から分析的に、事物Aの事物Bへの適合が、さらには、事物Aと事物Bそのものさえもが、見いだされると言ってもよい。したがって、「恰

好」のメタ規範が、「好」という価値判断を支える、たとえば、宗教的規範、倫理的規範、美学的規範などと一致している場合には、「恰好」を成している事物Aと事物Bの（適合）関係のありかた、さらにはときに、「恰好」を成している事物A、事物Bの存在それ自体がそうした諸規範に反することはない。逆から言えば、メタ規範と一致する諸規範に反する適合が、あるいは、その存在自体が諸規範に反する事物による適合が、「恰好」と呼ばれることはない。たとえば、恰好のメタ規範が、一定の倫理的規範と一致している場合、その倫理的規範のもとで規定される「悪人」と「悪行」の適合が、「恰好」と呼ばれることはない、ということである²⁴。

16世紀後半には、統語論上の変化と、それにもなう意味論上の変化を見いださう。統語論上の変化とは、名詞で用いられるようになることである。たとえば、『八帖花伝書』（1576-92年）（古文21から27）の用例を見たい。そこでの「恰好」の意味は、おおきく三つに分けられる。

一つ目は、ある具体的な事物Aの、別の具体的な事物Bに対して適合したありかた、という意味である。たとえば、「大庭の舞台は、三間四方。廂は、その恰好成べし」（古文21）では、「その恰好」は、「(たてよこ三間の) 舞台に対して適合する、廂のありかた」という意味である。注意すべきは、16世紀前半までの用例では、「恰好」は適合の行為や事態を指していたが、ここでは、事物のありかたを指示する、ということである。

二つ目の意味は、ある具体的な事物の規範的なありかたという意味、である。たとえば、「御前の能は、少、様子変るべし。板敷などの高さ、御見物所の恰好によるべし。」（古文24）においては、「御見物所の恰好」とは、「御見物所（身分の高い観客の席）」の規範的なありかた、という意味である。「御見物所」の規範的なありかたとは、具体的な「御見物所」のありかたが、「御見物所」の規範（満たすべき諸条件）に、適合した結果である。また、この二つ目の意味は、先の一つ目の意味と比べて、事物のありかたを指示する点で同じであるが、適合が「御見物所」という一つの事物で完結する点で、異なる。

三つ目の意味は、ある具体的な事物の、適合性を測る視点からとらえられた

²⁴ じっさい、すくなくとも16世紀前半までの用例において、悪い適合、あるいは、悪いものと悪いものの適合が語られることはない。文献学上、用例がないことを非限定的に示すことはむずかしいが、ここで言いたいことは、たとえば、悪人が、それにいかにもふさわしい悪行をなすことに、「恰好」ということばを適用することが、統辞論上（文法上）は可能であるが、意味論上は、不可能ではないにしても、むずかしい傾向があるということである。

ありかた、である。「大夫つれに立つ人、大夫より背の高き人、つれに立ぬ物也。恰好悪しきものなり。」(古文 27)において、「恰好」とは、「大夫より背の高いつれの、大夫に対するありかた」、であるが、それは、「悪しき」と言われるとおり、積極的に適合しているというわけではない。ただし、すくなくとも、つれの大夫に対する適合性を測る視点から見いだされた、つれのありかたである。

これらの意味の成立にいたる意味論上の変化は、より新しい意味を追いかける視点に立てば、おおまかには、「恰好」が直接に指示する適合が、諸事物のあいだの関係から、事物自体に内在化していく変化ととらえうる。『八帖花伝書』の用例における一つ目の意味である「舞台に対して適合した廂のありかた」と、三つ目の意味である「大夫に対するつれのありかた」においては、明確に二つの事物の適合が問題であるが、「恰好」が直接に指示するのは、あくまでどちらか一つの事物のありかた、である。それに対して、二つ目の意味である「御見物所の規範的なありかた」においては、「恰好」が直接に指示するものが一つの事物のありかたであるうえに、適合のベクトル自体が他の事物へは向かわない。この種の適合は、図式的に言えば、事物 A と事物 B との適合を、いわば水平方向への適合とするならば、事物 A と、それ自身の規範 A' との適合、いわば垂直方向への適合ととらえうる。

こうした意味論上の適合の多元化、多様化は、名詞化という統語論上の変化と連動している²⁵。おそらく、名詞の「恰好」が、助詞「に」、助詞「と」をともなわないことにより、適合の対象である他の事物を導きにくくなった結果であると言いうる。ただし、こうした意味の変化は、意味の拡張、あるいは多様化であり、より新しい意味が生まれるにつれより古い意味がすぐに失われるというわけではない点に注意したい。

第3節 「恰好」の非感性化と、適合の主観化—事物から判断へ

『八帖花伝書』と同時期に成立した『山上宗二記』(1588-1590年)(古文 28)には、同じく名詞の用例ながら、すでに述べた『八帖花伝書』の用例とはさらに意味論上異なる用例がある。すなわち、「形りかっこう面白壺也」とい

²⁵ 小野正弘(「漢語「恰好」の受容とその変容—中立的意味とプラスの意味の共存—)(『伝統と変容 日本の文芸・言語・思想』日本文芸研究会編 ペリカン社 2000年 p.228)は、「「恰好」の意味と、その統語的な条件とは密接に関わる」と示唆しつつ、「恰好」が、近世、近代および現代と推移する間に、どのように意味を変容して展開させ、元来の意味であるプラスの意味と新しい意味である中立的な意味を共存させていったのか」を問う。

う記述であるが、ここでは「形り」と「かっこう」という二つの語を並列した複合語²⁶において、「かっこう」が、意味上、「形り」と近似しており、適合の対象である事物、あるいは、適合の対象である事物の規範を明確には内包しない、「すがた、外見」という意味で用いられている。さらに、複合語ではなく単独語で、「恰好」が、そうした「外見」の意味で用いられるのは、『大倉虎明本』（金津地蔵）（1642年）（*古文30）の例が最初である²⁷。ただし、「かなぼうし（法師）がくらい（位）」という表現を考慮すれば、男児である「かなぼうし」が、地蔵のサイズ上のいわばモデルであるという点で、ここでの「恰好」は潜在的に適合を含んでいる²⁸。

また、18世紀以降、「かっこう」に「よい／わるい・あし」が続く例が多くなる。すでにみた『八帖花伝書』の「恰好悪しき」は16世紀の例であるが、たとえば、『田舎荘子』（上）（1727年）（古文46）、『寸南破良意』（1775年）（古文49）、『多佳余宇辞』（1780年）（古文50）、『仕懸文庫』（四）（1791年）（古文52）、『大蔵虎寛本』（1792年）（古文54）、『浮世風呂』（1811年）（古文61）がある。たとえば、『寸南破良意』（古文49）では、梅毒であると問われた女郎

²⁶ また、「形りかっこう」以外の複合語、すなわち、「年がかっこう」（『役者三味線』（京・梅津小太郎）（1699年）（古文36））、あるいは、「年かっこう」（『百合若大臣野守鏡』（1711年）（古文39））、「顔恰好」（『心中刃は氷の朔日』（1709年）（古文37））、「せいがかっこう」（『女殺油地獄』（中巻）（1721年）（古文44））、「せい恰好」（『岩淵夜話別集』（1730年から36年ごろ）（古文42））、「背恰好」（『浮世風呂』（三・下）（1810年）（古文60））が、おもに18世紀に用いられ出す。

このうち、「顔恰好」と、「せいがかっこう（せい恰好、背恰好）」は、「形かっこう」と同様に、意味上近似した二つの語を並べた複合語であり、そこでは、「かっこう」は、適合性を明らかに内包しない外見である。それに対して、「年かっこう（年がかっこう）」は、適合性を前提とする。「年かっこう」は、「外見」を意味するわけではなく、年齢を意味する。それも、いわゆる実年齢を意味するのではなく、外見から推測される年齢を意味する。「かっこう年」とも言うべき語である。注意すべきは、この語の使用にさいして、外見という感覚的なものに、それに適合する、年齢という理念的なものが内包される構造が成立していることである。「年かっこう」の初出年と同じころ1717年の『世間娘容気』（三）の「かっこうより気のほそい男にて、あたまからがたがたふるふて」にも、同様の傾向を見いだすことができる。男が、「かっこう」より「気のほそい」という文意は、より分析的に言えば、男の気の細さ（ずぶとさ）が、その外見に適合すべき細さ（ずぶとさ）より細いということであり、「かっこう」は、外見であると同時に、外見から推測される「気の細さ」を意味する。この語の使用にさいしても、「かっこう」に、外見に適合する理念が内包されている。

²⁷ 自らがつくろうとする地蔵の「恰好」を「かな法師」くらいである、と言う場面である。「くらい（位）」という度合いを意味することばを使っていることから、ここでの「恰好」には、大きさも含まれているといえる。

²⁸ 小野正弘もまた、「漢語「恰好」の受容とその変容—中立的意味とプラスの意味の共存—」（『伝統と変容 日本の文芸・言語・思想』日本文芸研究会編 ペリかん社 2000年）のなかで、このことを指摘する。

が、「かつかうの悪い」と不平を言う。いわば人聞きが悪いという意味であるが、このとき「恰好」は、人のありかたの、いわゆる社会通念に対する適合を、明確なしかたではないが、含んでいる。それに対して、『大蔵虎寛本』（1792年）（古文 54）の「恰好のよい御堂」という用例にかんしては、「御堂」という事物の規範であれ、「御堂」とは別の具体的事物であれ、事物の側で、適合の対象を、文脈から分析的に導くことはむずかしい。つまりここでの「恰好のよい」という表現においては、目の前の事物の外見に対する、「よい」という積極的判断にアクセントがあると言えるのではないか。

こうした風に、16世紀末から18世紀にかけて、適合性を希薄なしかたで内包する事物の外見を意味する用例と、適合性をもはや内包しない事物の外見を意味する用例が混在する。それは、新しい用法が出てくるにつれ、「恰好」自体から漸進的に適合性が剥奪されていったことを示している²⁹。「恰好」から積極性が剥奪される語誌に鑑みて、小野正弘は、言う³⁰。「恰好」の語は「元来プラスまたはマイナスの意味であったものが、のちに中立的な意味をもつようになるというタイプ」の語である、と。そのとき小野は、逆の変化、すなわち「元来中立的意味であった語がプラスまたはマイナスの意味を持つようになる」変化を想定している。たとえば、元来中立的な「めぐりあわせ」を意味する名詞の「しあわせ」は、「しあわせが良い／悪い」という用法にくわえ、形容動詞的な用法、動詞の用法が登場するにつれ、プラスの意味を得ていったと、小野は指摘する。たほうで、津上は「日本語形容動詞の成立と感性化」研究の結論の一部にこう言う。「形容動詞化を伴って語義が感性領域に転移するとき、必ず正または負または正負両価の価値を帯び、没価値的に終わる例はない」³¹。

小野と津上の図式を合わせて考えれば、「恰好」の語誌と「感性化」の関係にかんして一定の結論を得られる。すなわち、「恰好」という語それのみに着目すれば、「恰好」は、形容動詞、動詞からの名詞化を経て、没価値的になる傾向があるという点で、ゆるやかに「非（脱）感性化」したと言える。しかしながら、名詞化と同時に、「恰好がよい／悪い」という言いかたが出はじめたことを重視

²⁹ この点にかんして、小野正弘もまた、「意味の変化は漸移的に進む」（漢語「恰好」の受容とその変容—中立的意味とプラスの意味の共存—）（『伝統と変容 日本本文芸・言語・思想』日本文芸研究会編 ペリカン社 2000年）と指摘している。

³⁰ 小野正弘「漢語「恰好」の受容とその変容—中立的意味とプラスの意味の共存—」（『伝統と変容』日本文芸研究会編 2000年） p. 227

³¹ 津上英輔『あじわいの構造 感性化時代の美学』春秋社 2010年 p. 87。津上の主張の根拠にかんしては、を参照いただきたい。

したい。すなわち、「恰好がよい」は、「あたかもよしがよい」であるという意味では、いわば重複表現であるが、そのことは、逆に言えば、「恰好」から剥奪された適合性（あたかも）が、それと表裏する積極性（よし）とともに、意味上、「恰好」から、それに後続する「よい」へと移行したことを示すのではないか。適合性にかんして言えば、適合の規範が、事物の側から判断の側へ、あるいは、判断の主体（発言者）へ移行したことを示すのではないか³²。つまり「恰好」にまつわる「感性化（あるいは、感性化の進展）」とは、精確には、「恰好」から「恰好がよい」に至る語の使用の変遷における適合性の視覚化、主観化である³³。

第2章 「恰好がよい」から「かっこいい」へ

第1節 「かっこいい」は悪い—中味なき外見

「かっこいい」という語は、主要な現代語辞典には、おおむね1990年代に現れる³⁴。各辞典の記述でおおむね共通しているのは、「かっこいい」が、「かっ

³² 小野正弘は、近世において、「恰好（がよい／わるい）」は、「発話の用例」での使用が多いことを指摘する（『漢語「恰好」の受容とその変容—中立的意味とプラスの意味の共存—』（『伝統と変容 日本の文芸・言語・思想』日本文芸研究会編 ペリカン社 2000年）。

³³ 「はじめに」で紹介した津上の定義に基づけば、「感性化」とは、すなわち、「感性的でなかったもの（対象）または目（主体によるとらえかた）が、感性的になること」である。たほうで津上は、あることばが、「正／負」（小野の言う「プラス／マイナス」）という価値を備えていることが、そのことばが感性的であることの徴候であると考えている。したがって、津上の論に基づけば、「恰好」がその出はじめにおいてすでに、正の価値を備えており、その価値が時代を下るにつれ、希薄になり、ことばが中立化していくことは、ひとまず「非感性化（脱感性化）」（感性的なものが、感性的でなくなる）をとらえうるが、たほうで、「恰好」から「恰好がよい」への（さらには、後に見る「かっこいい」への）、変遷を、厳密な意味では、「感性化」（感性的でないものが感性的になる）をとらえることはできない。ただし、正負の価値を備えることは、感性的であることの徴候の一つであるにすぎない。つまり、「恰好」が、もともと正の価値を備え、感性的であるとしても、「恰好」が「恰好がよい」（やがて、「かっこいい」）にいたる変遷というラインをとらえれば、正の価値を備えることにくわえ、「視覚化」と「主観化」（「かっこいい」にいたっては、想像力の介入）が生じるという点で、それをまったく感性化と呼ぶことがむずかしいとしても、より感性的になるという意味で、感性化の進展という意味での感性化と言うことはできるであろう。また、適合性の視覚化とは、ここでは、事物の外見に基づいて適合が判断されるようになること、である。

くわえて、こうした「恰好」の変遷を、（非）感性化の一つのパターンであると認定するには、ほかの語、たとえば、「気持ち（がよい）」、「気味（がよい）」、「調子（がよい）」などを検討し、一定の普遍性を確保すべきである。

³⁴ 主要な現代語辞典の見出し語（あるいは、小見出し語）「かっこいい」の記述（用例は省く。）：

こう（漢字表記は「恰好」、あるいは「格好」）と「よい（漢字表記は、「良い」、あるいは「好い」）という二つの語からなる複合語に基づいた形容詞であると想定し、「かっこいい」によって形容される対象が、「見た目」や「見栄え」を通じて「よい」という積極的評価を得るということである³⁵。そうした語義上の二つのポイントに鑑みれば、「かっこいい」は、第1章で見た、18世紀以降に多く現れる「恰好（が）よい」という言いまわしの単語化、形容詞化の結果ととらえうるであろう³⁶。しかしながら、現代語の辞典に見る「かっこいい」の意味においては、「恰好（が）よい」において、「恰好」が、それに後続する「よい」に託すかたちで一応は保持していた適合性の視点が、抜け落ちているように見える。しかし、以下に見るように、「かっこいい」が登場した当初の、その語にまつわる議論のなかに、適合性のゆくえをさぐることができる。

かっこ-い・い【かっこ▽好い】

〔形〕《「かっこ」は「かっこう（格好）」の音変化》見栄えがしたり、態度・行動がさわやかだったりして心ひかれる、という気持ちで使う語。すばらしい。

（『大辞泉』第二版 小学館 2012年）

*1995年に第一刷発行の第一版で見出し語に収録。

かっこ-い・い

〔形〕（「かっこ」は「恰好（かっこう）の転）目立って、見た目がよい。

（『広辞苑』第六版 岩波書店 2008年）

*1998年に第一刷発行の第五版で、見出し語に収録。第四版は、1991年に第一刷発行。

かっこ-い・い【恰好良】

〔形口〕姿、形、様子などがすぐれていて好ましい。見ばえがよい。

（『日本国語大辞典』第二版 小学館 2001年）

*2001年に第一刷発行の第二版で、見出し語に収録。第一版は1972年に第一刷発行。

格好良・い（見出し語「かっこう」内の小見出し）

① 姿・形がよい。特に、いかにも洗練されているように感じられるさまをほめていう語。かっこういい。

② 人の行動について、いかにも潔いさま。かっこういい。

（『大辞林』第三版 三省堂 2006年）

*1988年に第一刷発行の初版で、見出し語「かっこ」のなかの用例に「-いい」を収録し、1995年に第一刷発行の第二版では、加えて、見出し語「かっこう」の小見出しに「-良・い」を収録した。

³⁵ 「かっこいい」は、とくに行動に対して「さわやか」（『大辞泉』第二版 小学館 2012年）であるという意味である、あるいは、「潔い」（『大辞林』第三版 三省堂 2006年）という意味である、という記述もある。

³⁶ 本論は、「恰好（がよい）」の語誌を、1800年ごろまで追い、その後は、特筆すべき意味論上、統語論上の変化はないとする。たほうで、1960年前後に登場した「かっこいい」が、「恰好がよい」の形容詞化の結果であるとするとき、時間軸上、約1世紀半をすっとばした印象を与えるかもしれない。「かっこいい」がじっさいに、「恰好がよい」の唐突な形容詞化によって生じたとしても、当の1世紀半のあいだの「恰好」に、微細な変化であれ、メタモルフォーゼのきっかけを拾い集める余地は、あるであろう。

「かっこいい」が現れたのは、1960 年前後である³⁷。とりわけ 60 年代に、「子ども」、「若者」のあいだで流行した「かっこいい」は³⁸、当時において一つの問題概念であった。「スマート」、「さっそうとしている」、「強い」、「新しい」、「かわいい」、「美しい」、「いきな」といった一定のことばと内包の一部を共有しながらも、それらのどのことばとも異なり、きわめて広い外延をもつ「粗雑」³⁹で、複雑な概念とされた⁴⁰。外延の広さは、意味論上の多様性と同時に、統語論上の多元性をも導き、たとえば、「遊園地に連れていってもらおう」ことを「か

³⁷ 「かっこいい」の発生時期に対する言及には、たとえば、以下のものがある。

「中原：イカす、という言葉が出たのが、裕次郎が出たときですから、昭和三十一、二年ですね。コシノ：そうすると、カッコいい、は、そのあとね。」

（「座談会 映画の中の「カッコいい」スタイル / 長沢節；コシノ・ジュンコ；中原弓彦『映画ストーリー』12(6)(142) 雄鶏社 1963 年) pp. 59-63

「中原：そういえば昭和三十三年の秋ごろ、ぼくが下宿していた家に高校生がいて、戦争の本ばかり読んでいるから、何でそんな軍人の話なんか読むんだと言ったら、軍神はカッコいいからだ、と言われて、びっくりしたな。」

（「座談会 映画の中の「カッコいい」スタイル / 長沢節；コシノ・ジュンコ；中原弓彦『映画ストーリー』12(6)(142) 雄鶏社 1963 年) pp. 59-63

「このごろ、「かっこいい」という大阪生まれの新語が用いられているが、これは「格好いい」ではなくて、ほんとうは「かっこい」なのである。「かっこい」は「賢い」の音便的表現で、大正十年ぐらいには、もう盛んに用いていた。ただ私たちはむしろ反語的な意味で用いたものだ。」（武智鉄二「かっこい奴」『東京新聞』1964 年 5 月 7 日朝刊 3 面 *見坊豪紀『ことばのくずかご』（筑摩書房 1979 年）を参照。）

「「カッコいい」という言葉のつかわれ出したのは、ほぼテレビの普及と時を同じくしていて、テレビ関係者の中から生れた、一種の方言である。昭和三四年ごろ、ぼくは坂本九が、この言葉を、すでに「カックいい」とくずして口にし、なんのことかと、奇妙に思ったことを覚えていて、「カッコいい」はまた、テレビ界の生んだ、その方言の第一号であるかもしれぬ。」

（野坂昭如「何を賭ければカッコいいか—それは死である（風俗—生の廢墟（特集）」『朝日ジャーナル』朝日新聞社編 1968 年 p. 15)

「「カッコイイ」が出まわったのは、去る三十七年だった。」（村島健一「感覚的表現と思考的表現」『言語生活』1970 年 10 月号 *見坊豪紀『ことばのくずかご』（筑摩書房 1979 年）を参照。）

³⁸ 見坊豪紀は「62 年の流行語」という位置づけで、『ことばのくずかご』（筑摩書房 1979 年）に、「カッコいい」の語をとりあげている。

³⁹ 「いまの子どもが、価値観の基準として、カッコイイ、ということばをしきりに使うことは良く知られている。恰好の良さとは何か？これははなはだ定義しにくい粗雑な概念であるが、言い得て妙なことばなので、いつかおとなの世界にまで浸透してきてしまっている。」（佐藤忠男『少年の理想主義』明治図書出版 1964 年 p. 9)

⁴⁰ 「美しいとか、品がある、みやびやか、優しい、そういった古い贅辞のどれにもあたらない、彼らがつくり出した秩序、その信ずる美意識にてらして、なにかをほめる時の、まったくあたらしい、「新語」なので、だから、一々何かのバストも、ナチスの制服も、エンタープライズ号も、大島紬も「カッコいい」で、大人たちがこの混乱を攻撃しようが、嘆こうが、いわばナンセンスなことではかない。」（野坂昭如「何を賭ければカッコいいか—それは死である（風俗—生の廢墟（特集）」『朝日ジャーナル』朝日新聞社編 1968 年 pp. 15-16)

「カッコいい」と表す用例⁴¹においては、「カッコいい」は、ほとんど感嘆詞のように機能する⁴²。外延が広く多様でありながらも、一定の優勢な外延は存在する。1960年代から70年代に出版された「カッコいい」を論じるもろもろの文献において頻出する外延は、たとえば、「戦争」、「ゲバ」、「自動車」、「飛行機」、「スタイルのよい人」、「スポーツをしている人」、「服装」、「ポーズ」、「学業成績がよいこと」、特定の「映画俳優」や「スポーツ選手」、「まんがのキャラクター」、特定の「職業（デザイナー、パイロット）」など、である。たとえば、「子ども調査研究所」の1968年のアンケート⁴³は、小学生の「カッコイイ観」を、「カッコイイ」の優勢な外延を通じてさぐる。

そうした優勢な外延のなかで、とりわけ問題を孕んでいたのは、「戦争」である。1960年代には、戦争を描く漫画や、同じく戦争を描く、「図解」付きの雑誌記事が人気を博すにつれ、戦争をカッコいいととらえる「子ども」が増えたことに鑑みて、「カッコいい」が、おもに教育論の枠内で問題化された。たとえ

⁴¹ 「こんどの日曜日に遊園地に連れてってあげる」といわれると“わあ、カッコイイ”です。」（高山英男「子どものカッコイイ観」『旭の友』22(5)(262)長野県警察本部警務部教養課 1968年) p. 47)

⁴² 「カッコいい」が「感嘆詞」である、あるいは、感嘆を表すという見解には以下がある。
「長沢：ぼくがカッコいい、という言葉が一番感動的に感じたのは、子供が言ったときです。それまで、日本の男の子は、カッコいい、という感嘆詞を持たなかった。」（「座談会 映画の中の「カッコいい」スタイル / 長沢節；コシノ・ジュンコ；中原弓彦」『映画ストーリー』12(6)(142) 雄鶏社 1963年) pp. 59-63)

「バスケットのシュートがきれいにきまったときや、テニスなどでネットすれすれにスマッシュがきまると、思わずカッコいいという。」（東京・市川美晃）
ここでいうカッコよさは技術的に、あの人はじょうずだというほめことばとはちょっとちがって、シュートしたかっこうとバスケットにおさまったボール、ネットすれすれにうちこまれたテニスの球への感嘆や驚きなのだ。」（「男の世界・女の世界③ “カッコいいナー”もこう違う 同じことばでも、男子と女子では使い方が……。」『中学二年コース』10(3) 学習研究社 1966年 p. 194)

⁴³ 東京都内の小学生 624 人の「カッコイイ」観（子ども調査研究所 1968年）

カッコイイもの	カッコわるいもの
① カラーテレビ	① サラリーマン
② スポーツカー	② ミニスカート
③ 王選手	③ ジーパン
④ トランシーバー	④ 美容師
⑤ 新幹線ひかり号	⑤ バービー人形
⑥ クリスマスケーキ	⑥ ハイヒール
⑦ ジェットパイロット	⑦ 自動車の運転手
⑧ レーシングカー	⑧ 佐藤首相
⑨ 加山雄三	⑨ GI ジョー（男子向きの着せかえ人形）
⑩ 長島選手	⑩ 大鵬

ば、「カッコいい」を論じた最初のひとは、「現代っ子」ということばを発案した阿部進である。阿部は以下のように言う。

「いったいその内容はどうなっているかはわかりません。しかしその外容を見た時、七万トン以上もある戦艦大和が太平洋の荒波をけたてて進む姿、それに軍艦マーチをかなでられた時、心がわくわくしなかったとしたら、どこかがコワれている子どもではないかと思うのです。外容はだれもがわかり、それにとまってなかみを想像します。でてくる答えは、「カッコいいな」ということばになってきます。カッコいいから一度はやってみたい。—(中略)—一度ゆっくりと丘の上かなんかにこしかけて、戦争というものを見物してみたいな、ということもカッコいいなというグループにはいます。しかし、ここでおもしろいのは「自分がかんじょうにはいっていない」ということです。「自分をかんじょうに入れない」ということは、自分が戦うというのではなく、自分はどこか安全な場所ですわっていてゆっくり観戦していたいというものです。—(中略)—「カッコいい」部面だけを抜きだして考えているわけなのです」⁴⁴。

阿部は、「子ども」は、勇ましい戦艦大和の「外容」から「なかみ」を想像すると言う。「子ども」はさらに、戦争を「カッコいいから一度はやってみたい。」と思うが、自分が戦うことは想定しておらず、安全な場所から「観戦」する立場で、「カッコいい」側面だけに目を向ける、と言う。こうした点で、「カッコいい」は、視覚メディア、あるいは、「想像(イメージ)」と結びつけられていき、「カッコいい」に対する考察は、映像時代に対する考察と重ね合わせられていく。たとえば宮野英也によれば、「「カッコいい」ということばは、映像文化の中で育った子どもたちが、対象を直感的にとらえたことばである。自分と対象(現実)との間に距離をおいて客観的に受けとめるという冷静さもあるが、そのなかみについての思考の省略があり、論理の飛躍がある」⁴⁵。

こうしたしたかで、「カッコいい」は、その出はじめにおいて、いわば外見に執着し、中身を軽視するという咎で、断罪された。「カッコいい」ということばによってあるものをとらえるとき、そのものの中身は、「思考」ではなく「想像」で埋められ、「論理」を欠く。そこから、「若い人の“カッコよさ”」ということ論じるときには、道徳的な意味での価値観というものは、その論議の中には

⁴⁴ 阿部進『現代子ども気質』新論評 1961年 pp.237-238

⁴⁵ 宮野英也「<現代っ子語録> 「カッコいい」と「カッコわるい」」(『小六教育技術』22(6)小学館 1969年 p.97)

入れられない」⁴⁶という帰結にも至る⁴⁷。第1章に見たとおり、「恰好」が、たとえば社会通念との適合を指示する場合にはとりわけ、倫理的と言える規範性が介入した。それに対して、「カッコいい」の概念史は、意味論上、脱倫理的、あるいは、反倫理的な様相さえをもって始まる。よって、「カッコいい」の適合の規範は、倫理的規範と一致するとはかぎらない、という予想がひとまずは成り立つであろう。

第2節 「外見」という意味

ただ、「カッコいい」に対しては、否定的な批判ばかりではなく、肯定的な視線もあった。たとえば佐藤忠男は、「いまの子どもたちが、カッコイイものは良い、という立場から、肉体的、感覚的、視覚的な価値に敏感になってきた」ことを「喜ぶべき現象」と述べたうえで言う。「カッコとは、丸とか三角とかいった単なる抽象的な形態のことではなく、それは情緒や思想を含んだ表情をもつ形態なのである。ゼロ戦や戦艦大和など、ただの機械にすぎないものでも、実は、勇敢とか、悲壮とか、俊敏とか、堂々とかいった〈表情〉や〈身ぶり〉をもっており、これらの感情的あるいは思想的な意味を含んだ形態に心をひかれるとき、はじめて、カッコイイ、ということになるのだ。カッコイイ形態の現わす意味を探求することが必要だ」⁴⁸。すなわち佐藤に即せば、「カッコいい」という評価の対象は、中身に対する外見という表層ではなく、むしろ中身を成す「意味」の層であり、その意味は「思想的」でありもする。

「カッコいい」ものがたんなる表層にあるのではないという見かたは、たとえば渡辺武信の1972年の論考にも、ある。渡辺は、「正統やくざ映画」の「ヒ

⁴⁶ 金子詔一、小林和夫、副田義也、比留間一成、安香宏の対談（引用部分は、副田による）「フーリング時代の—カッコよさの心理と現実」『青少年問題』18（3） 中央青少年問題協議会編、出版 1971年 p.23

*ここで言う「若い人」が20歳前後のひとであるとすると、それは、「カッコいい」が現れた1960年ごろに10歳前後であったひとである。

⁴⁷ ほかに、下記の指摘がある。「たとえば、サーキットで車が衝突してペシャンコとなり、レーサーがほうりだされるような、それ自体楽しいとか、しあわせだとかいえないシーンを、しかし子どもたちは、“カッコイイ”という形容に託して、その瞬間のスリルやサスペンスの感興を表現したりするのです。

そこには、いままでの習慣・道徳の基準とはことなった軸からの対象評価が感じられるのです。」（高山英男「子どものカッコイイ観」『旭の友』22（5）（262）長野県警察本部警務部教養課 1968年 p.47）

⁴⁸ 佐藤忠男『少年の理想主義』 明治図書出版 1964年 p.10

一ロー」が「カッコいい」理由をこう語る。「正統やくざ映画における鶴田浩二や高倉健—（中略）—彼らはなぜカッコいいのか。それは一口に言って彼らの一挙手一投足が背景によって象徴的に意味づけられているからである。—（中略）—悪玉たちは利権を求めて木場魚市場の流通過程の組織化や、荷役作業の合理化、あるいは長屋をとりこわしてマーケットをつくるなどの都市再開発を志す近代化論者として乗りこんでくる。—（中略）—それに対してヒーローは必ず唐棧かなんかの着物を見事に着こなして現れる。彼は、伝統的衣服を一番見事に着こなすことで、その衣装を生んだ文化の代表者であることを視覚的に宣言しているのだ。彼らはたんに絵画的な構図として背景と調和しているだけではなく、背景となる伝統文化が体系的に装備しているシンボル群を媒介として、世界の核心と深くつながっている。—（中略）—着流し姿の侠客は、このようなシンボル体系を媒介として、全世界を後光のように背負って立ち現れるからこそ、カッコいいのである」⁴⁹。佐藤忠男が言う「かっこいい」もののもつ「意味」を、渡辺は、映画の登場人物と「背景」との適合を通じて語ると言える。すなわち、「背景……それはたんにヴィジュアルな構図のために必要な書割のような薄っぺらなものではない。カッコよさとは、しょせんながめられる限りのものであるとは言ったが、しかしそこには、ながめる者の視線を深々と受け入れる奥行きが必要なのだ」⁵⁰。

佐藤は、「カッコイイ形態」の「意味」を強調することによって、かっこいいものが表層的ではないことを主張しようとした。渡辺は、当の意味が、ある事物と事物（登場人物と背景）との適合関係に支えられていることに重点を置いていると言いうる。「かっこいい」ものが、諸事物の関係のなかで起ちあがる以上、そうした関係の力学が展開する場所は、「薄っぺらなもの」ではないゆえに、それを渡辺は「奥行き」と呼ぶにいたる。ここまでの議論は一見、第1章でみた18世紀までの「恰好」の語誌上の、適合性の視覚化と主観化を揺りもどす方向で進んだと言える。つまり、語誌上で、事物の表層（外見）に収斂していった適合性が、諸事物のあいだの関係にたんに還元されたかに見える⁵¹。しかし、

⁴⁹ 渡辺武信「渡辺武信による恰好—カッコよくなるのはコワイのだ」（『SD—ここから始まる—恰好』鹿島出版会 1972年）p.8

⁵⁰ 渡辺武信「渡辺武信による恰好—カッコよくなるのはコワイのだ」（『SD—ここから始まる—恰好』鹿島出版会 1972年）p.8

⁵¹ 「かっこいい」が表層にのみかかわるのではないという見かたのみでは、本文で以下に見るように、「かっこいい」の特質をとえらきることができるとは言いがたい。そうした見かた自体は、「かっこいい」のみではなく、「恰好（かっこう）」にも適用しうるからである。たとえば石

その還元は、「カッコいい」という判断を起点にしてなされていることに注意したい。われわれは、いちいち映画の登場人物と「背景」と適合性をはかっただけで、登場人物が「カッコいい」という判断を下しているわけではない。むしろ、端的に登場人物が「カッコいい」という判断が先にあり、その結果、登場人物が背負っている世界が、登場人物との適合性ととも、立ち現れる。その意味で、世界という「奥行き」は、まさに手前から発して奥に向かって展開するのであって、「カッコいい」という判断の原因であるというよりは、判断に起因する結果である、という見かたを提示するのが、次節にとりあげる斎藤である。

第3節 内実の外見化—規範の構築

斎藤次郎は、「恰好がいい」と「カッコいい」の区別によって、「カッコいい」の輪郭を描き出そうとする。「恰好がいいという場合、「が」には限定の意味がふくまれる。強い言い方をすれば「恰好だけはいいが中味はわからない」かも知れないのだ。「カッコいい」と子どもが発音するようになったとき、この限定の意味が消えた。—(中略)—カッコとは、恰好そのものではなく、外見に表出したものの本質をふくむ対象総体なのであり、外見だけを指すのではない。「カッコいいの美学」とぼくがよぶものは、外見の印象が確かに伝えるところの内在的価値を信頼する志に依拠する」⁵²。

斎藤は、自身の「カッコいいの美学」を説き起こすにさいして、具体的な事

子順造は、「恰好がつく」という表現に、渡辺の言う「奥行き」に相当するものを見いだす。

「恰好という語には、“恰好な値段だ”や“恰好の材料がなくて”とかいうふうに、ころあいのとか、相応の、などという意味の使われ方もある。しかし、“恰好”がつくなどの恰好は、体裁とか様子であり、それが“つく”とは、体裁が整う、それとして見られる、といった意味合いであったろう。そして“さまになる”は、“恰好がつく”以上に“きわめつけ”とか“ぴたりときまった”とか、いわば抜きさしならない恰好のつきよう、と理解していいようだ。—(中略)—要するにある人が、それを着て“恰好がつき”、“さまになる”ようなそのような衣服は、どれも制服だということになる。—(中略)—しかし衣服が制度的なものだというのは、たんに条文に規定されていて着用が義務づけられているからではなかったはずで、それを着ることが自らある行為や生活を逆に条件づけてもいく、その全過程のことであったろう。とすれば、体裁が整うとか見られるという“恰好がつく”は、表面的に整った姿、形の謂ではなく、やはり生活時間・空間の秩序とそのあつみに見合う、ある収まりをいうのだと思える」。(石子順造「石子順造による恰好—とくに〈制服〉について」(『SD—ここから始まる—恰好』鹿島出版会1972年) pp. 6-7)

石子の言う「生活時間・空間の秩序」が、渡辺の「背景」と一致する。それは「あつみ」をもつゆえに、渡辺が言うように、「薄っぺらなもの」ではありえず、「奥行き」を備える。

⁵² 斎藤次郎「カッコいいの美学—漫画のコミュニケーション機能」(『子ども漫画の世界』現代書館 1979年) pp. 263-264

象を想定している。まんが『サーキットの狼』⁵³に端を発するスーパーカー・ブームである。斎藤は、『サーキットの狼』において、「車はつねに外側からしか描かれていない」ことに着目する。そのうえで、「スーパーカーがカッコいいと思われたのは、高性能にふさわしいシャープなボディ・ラインを誇っていたからだ。逆にいえば、カウンタックの地を這うようななめらかなシルエットが、その内奥にすさまじい瞬発力とスピードを秘めていると信頼できたとき、その外見は内実の表現として子どもの心を打った」⁵⁴と分析する。

斎藤のことばを借りつつ言えば、「カッコいい」は、「外見から内実を類推するのではなく、外見を本質の重要な一部と見なす、いわば一つの生きかたである。斎藤が言う、外見の本質化の事態は、同時に、本質の外見化とも言えるであろう。それは、言い換えれば、知性的認識が感性的認識に置き換えられていく事態である。たとえば金子詔一は、そうした事態の一端を指摘する。「”カッコイイ”ということは、フィーリング、感じるということに通じると思うんです。—（中略）—たとえば、わかったということ、”カッコイイ”というわけですが、そういう頭でわかる考える感覚とはもう違ってるわけです」⁵⁵。

斎藤の主張においては、カッコいい生きかたは、やがて「現実から抽象した本質に価値を見いだす近代的認識を遡航し、想像力から現実を紡ぎ出す」⁵⁶ことにいたる。スーパーカーを、どころか、車を運転しない「子ども」は、「その外見にふさわしい内実を読み深めていく」しかたで、「現実」を構築する。そのとき、「カッコいい」という判断を出発点にして、「外見によって内実をつくり出し、すなわち適合の対象を事物の側に構築しながら、事物の内在的な適合性を確保するという「逆転」の構造が成立する。言い換えれば、ある事物が、なにか（他の事物や、規範）に適合しているゆえに、「カッコいい」と判断されるというベクトルに対して、「カッコいい」と判断されるゆえに、なにかに適合しているある事物があることになるという逆のベクトルが在る、という構造によっ

⁵³ 『週刊少年ジャンプ』（集英社）に1975年から1979年まで連載された。

⁵⁴ 斎藤次郎「カッコいいの美学—漫画のコミュニケーション機能」『子ども漫画の世界』現代書館 1979年 p. 264

⁵⁵ 金子詔一、小林和夫、副田義也、比留間一成、安香宏の対談（引用部分は、金子による）「フィーリング時代の一カッコよさの心理と現実」『青少年問題』18（3）中央青少年問題協議会編、出版 1971年）p. 22

⁵⁶ 斎藤次郎「カッコいいの美学—漫画のコミュニケーション機能」（『子ども漫画の世界』現代書館 1979年）p. 269

て、かっこいい事物が成立するということである。

こうした「かっこいい」の適合性の逆説的な特質は、第1章で見た、適合性の所在の変遷、すなわち、「恰好」の名詞化にともない、適合の規範が、諸事物のあいだから一個の事物の内へと、さらに、事物から判断の主体（発言者）へと移行していく傾向の延長線上でとらえることができる。すなわち、「恰好がよい」の形容詞化によって、判断の主体の側にある適合の規範が、もう一度、「想像力」によって主体から事物の側へ投げ返されるととらえられる。^{あたかもよし}「恰好」から「恰好がよい」へ、さらに「かっこいい」へといたる過程には、感性的判断と想像力が介入する度合いが強くなっていくという意味で、依然、適合性を軸とした感性化（あるいは、感性化の進展）を見いださう。

津上は、「日本語形容動詞の成立と感性化」と「英語における精神異状語の感性化」の研究を通して、それぞれ「江戸時代」と、「20世紀後半」は感性化の時代であった」と仮説的に結論づける⁵⁷。本論で見たように、江戸時代に「恰好がよい」の普及、1960年代以降に「かっこいい」の流行があることもまた、両時期において、いわゆる大衆文化が興隆したと無縁ではないのではないかと⁵⁸。

おわりに—適合性の逆説のゆくえ

1960年代の流行語「かっこいい」は、1970年代後半から90年ごろにかけては、文献上、影をひそめる。その後、90年代なかばから現在にいたるまで、いわばリヴァイヴァルがある⁵⁹が、辞典への収録時期から見ても、それを経て、

⁵⁷ 津上英輔『あじわいの構造 感性化時代の美学』春秋社 2010年 p.84、p.88

⁵⁸ ただし、「20世紀後半」にかんして、津上は英語圏をあつかうのに対して、本論は日本語圏をあつかう。

また、増淵も、「美意識」を通じての、江戸時代の庶民文化と、昭和時代の庶民文化の親しさを指摘する。「おそらく、「いき」と「かわいい」は、もっとも日常生活に根差した美意識ではないか。鎖国体制の中で、天下泰平の世を謳歌した江戸時代の庶民文化と、高度経済成長を謳歌した昭和時代の庶民文化との間には、多くの共通点が認められる。そして「いき」と「かわいい」は、両時代のそれぞれの美的シンボルなのだ。(増淵宗一『かわいい症候群』NHK出版 1994年)ただし増淵は、「多くの点で、「いき」と「かわいい」は、きわめて対照的だ」とするので、江戸時代と昭和時代の親しさは、庶民文化において、新たな独特の美意識が生成するという点にあるであろう。

⁵⁹ 国立国会図書館の登録文献を、「かっこいい」、「カッコイイ」、「カッコいい」などで検索した結果を参照した。ただし、ある年に発行された文献数の絶対数がすくないからと言って、人口に膾炙する度合いが減じたとは必然的に言うことはできない。また、もし減じているとしても、そのことはたとえば、1970年代に、「ナウな」、「ナウい」ということばが使われはじめたことと、関係するかもしれない。つまり、「かっこいい」ということばの使用件数の増減は、「かっこい

現在の常用語に成り上がったと見られる。

1992年の映画『紅の豚』の広告コピー「カッコイイとは、こういうことさ。」(図①)は、映画から切り離され、それ自体が人口に膾炙する程度に評価されている。それが名コピーたるゆえんは、いわゆるダンディズムを体現する「豚」のキャラクターの生きざまを代理しているからでもあるが、その身ぶり自体が、まさに「カッコイイ」を体現しているからではないか。すなわち、「カッコイイとは」という、概念の内包を記述する形式をとりながら、当の内包を、「こういうこと」というしかたで映画、あるいは、ポスターの絵、つまりは、イメージへと投



図①：映画『紅の豚』の広告ポスター（スタジオジブリ 1992年）

い」という感性の自律的な盛衰の反映ではかならずしもなく、他の感性的な（流行）語の使用件数との偏差のなかで、とらえるべきである。こうしたことばのいわば交代劇にかんしては、たとえば、以下の指摘がある。

「ひところ「カッコいい」とかいう言葉がやたらにはやった。「おしゃれな」というのは、おそらく、それに代わって使われだしたのだろうが、私にはこのふたつの言葉が、現今の軽薄文化の象徴のように思われてならない。そう、何もかも、ただ、格好だけなのである。それは、まさしくコピーにすぎず、コピーというアメリカ語の意味通り、複写と同時に、宣伝文句のコピー文化を代弁している。」(森本哲朗『日本語 根ほり葉ほり』新潮社 1991年 pp.78-80)

また、「カッコいい」が、ほぼ30年ごしにリヴァイヴしたことは、商業文化、メディア文化の30年サイクルと呼ぶべき構造に基づいているかもしれない。すなわち、1960年代に10歳代、20歳代をすごし、「カッコいい」文化を担った当時の「子ども」、「若者」は、30年後には、40歳代、50歳代に達している。そのとき、いわゆる管理職に就くなどして社会上の権力と経済的な余裕をもち始めるかれらかのじよらの嗜好が、社会に流通するメディア・コンテンツに影響を与えやすくなる。そのうえで、あるひとの嗜好に、そのひとがいわゆる青春時代に享受した文化が反映しがちであるとすれば、もろもろの文化がおおむね30年ごとにリヴァイヴする傾向が成立する。たとえば、ポピュラー音楽のリヴァイヴ現象には、そうした傾向がある。また、「ノスタルジー消費」は、そうした傾向とともにスタイル化された消費のありかたであると言える。

げ返す。その結果、「かっこいい」の内包は外延化され、普遍化は個別化に転じ、思考は想像にとって代わられる。むろん、「これが〜だ」型の主張は、商品広告の常套句であるが、このコピーは、ポスターの上でのレイアウトも含め、寡黙なる雄弁とでも言うべきたたずまいを呈している。われわれはそれに対して、説明を要求する衝動に駆られることはなく、むしろ「カッコイイ」とは、説明を忌避し、言語化を回避する、まさにそういうことだという風に、納得するのではないか。すなわちこのコピーは、「カッコイイ」にぴったり適った対象を、堂々と提示しつつ、イメージへと逃れさせるという点で、すでに述べたとおりの映像時代の感性である「かっこいい」を体現する、それ自体が「カッコイイ」コピーである。

たほうで、やはり「カッコイイ」を謳ってしまっている以上、このコピーは、いわばダンディズムの自己申告であり、その点でいつでも、かっこ悪いものに墮しうる。しかし、コピーがことさらに嘲笑を招くことがないとすれば、それは、『紅の豚』(のポスター)において「カッコイイ」のが、「豚」であるからではないか。つまり、「豚」は、そもそもかっこ悪いからこそ、よりかっこ悪くなりがたく、むしろかえって、そのかっこよさが際立つのではないか。「紅の豚」は、かっこ悪いがゆえに、異化効果によって、「カッコイイ」ものたりうるといふ、ここでも、一つの逆説が浮上する。

そうした意味での、いわば自虐的な美化が、1990年代以降の「かっこいい」に蔓延する。90年代以降には、たとえば、「障害(者)」、「(きつい)労働(者)」、「エコロジー」、「おやじ」、「女の子(女子、少女)」といった、それまでは「かっこいい」と呼ばれにくかった、あるいは、「かっこ悪い」とされていた事物を、「かっこいい」と評することで積極的に価値づける傾向がある⁶⁰。さらに、典型化すれば「かっこ悪いことはかっこいい」という逆説的主

⁶⁰ たとえば、その傾向を示す文献に、以下がある。高田憲一「特集 LOHAS ブームの本質 環境は「かっこいい」で売る」(『日経エコロジー』79号 日経BP社 2006年)、谷村新司「ココロノオト(7) カッコいいお父さんになる!」(『文蔵』第7巻 PHP 研究所 2006年)、「この人この経営 自然農法はかっこいいぞ—群馬県富岡市 掘込聖さん」(『地上』第62巻10号 家の光協会 2008年)、天島万貴子 堀口桂子「障がい者はカッコイイ! (特集 リハビリテーションを支える繊維(2))」(『繊維学会誌 Fiber』69巻12号 2013年)、シンシア・ローリー、アイリーン・ローゼンズウィーグ(森光世訳)『スウェル・ガール: カッコイイ女の子になるための、魔法の絵本』朝日出版社 2000年、『Garçon girls: 女の子のための男装カルチャー誌: 男子より「カッコイイ!」を手に入れる』ユーメイト 2013年。

また、「エコロジー」と「かっこいい」の接続にかんしては、津上が指摘している。「若いスポーツ選手たちの個人的エコ活動が共感を呼んでいるようだ。人気ゆえの影響力ばかりではないだろう。行政やマスコミが声高に説く中で、選手の地味な営みが際立って人々を動かす

張を含むことばが、広告コピー(図②) やポピュラー音楽の歌詞に散見される。つまり、1992年の『紅の豚』の広告コピーは、1960年代以降それまでの「かっこいい」を受け継ぐと同時に、あたかもリヴァイヴアルの口火を切るしかたで、1990年代以降に展開する「かっこいい」の特質の傾向を示唆している。

第2章で述べたとおりの逆説のベクトル、すなわち、事物の適合性が「かっこいい」という判断を導くのではなく、「かっこいい」という判断が事物の適合性を導くというベクトルの行き着く先では、「かっこいい」という判断が、事物の適合性をつくるのみならず、ある新しい適合の規範をつくるという事態が生じるだろう。そのとき新しい規範は、より古い規範とのずれを含みうる。その点で、1960年代において、「かっこいい」が、既存の規範にそぐわない事物、たとえば、新しいもの、変わったもの、非日常的なもの、に使われがちであることには納得がいく⁶¹。さらに、新旧の規範のずれを判断者が知覚す



© watanabejunpeisha Inc.

図②：「Benesse 進研ゼミ 高校講座」ポスター（ベネッセコーポレーション 2010年）

(<http://www.watanabejunpei.jp/works/669>)

のは、ある行為が社会的または道徳的によいと判断されたとき以上に、「かっこいい」という感性的判定を受けたときに、人をその気にさせる強い力をもつからではないだろうか（津上英輔「感性的質の生成構造、または感性史の試み」『美学』第61巻1号（236号）美学会編 2010年 p.1）。1960-70年代の「かっこいい」において、倫理的価値と感性的価値は、離反し、ときに対立したが、90年代以降の「かっこいい」は、倫理的価値を感性的価値に読みかえさせる機能を担うとも言うる。

「カッコイイ」と「女の子」の関係かんして、下記の指摘がある。「一般に、女の子に関係のあるものには男の子はぜったい否定的です。」（高山英男「子どものカッコイイ観」『旭の友』22（5）（262）長野県警察本部警務部教養課 1968年 p.47）対して増淵は、1970年代後半に人気をきわめたピンク・レディーを、「もって生まれた顔や姿が美しいというよりも、むしろ歌って踊って演技もできる、才能ある少女、特技のある少女」、すなわち「カッコいい少女」、の代表であるとする（増淵宗一『かわいい症候群』NHK出版 1994年 p.43）。ただし、「カッコいい少女」は、70年代当時にピンク・レディーを評したことばではなく、90年代の増淵のことばである点に留意したい。

⁶¹ 「かっこいい」を新しいもの、変わったもの、非日常的なもの、に使うという指摘には、たとえば、以下がある。

「「カッコいい」「イカス」ということばは、日常生活の上でも使われるが、そのニュアンスからすれば、日常性に埋没した生活や刺激のない世界への反抗や、そういう世界からの脱出を意味するものに寄せられることが多い。」

（管忠道『講座マス・コミュニケーションと教育 第2巻（マスコミュニケーションの中の子

る場合は、「かっこいい」の判断は、たとえば、竹田の言う「定型に対する反駁」⁶²、鷺田の言う「はずし」⁶³に転化するであろう。むろん、それは、既存の規範に適合すべきではないという規範への適合を意味するという点で、逆説的な意味で、適合の範囲にはある。しかしながら、このとき、「かっこいい」は、たえず自身のうちにずれを孕みながら適合を求め続ける運動をとまなう感性と言えるのではないか。

さらに言えば、このいわば不適合への適合は、ともすれば、「かっこいい」にとどまらず、もろもろの感性的質が生成し、それ自身で変容する原理そのものではないだろうか。冒頭に紹介した津上の論のとおり、感性的質が感性的判断に基づいており、かつ、感性的判断が、たとえば、ある青のなかに別の青を見ることが、つまりは、とらえきることのなかで、とらえきれなさをとらえる、と

ども)』明治図書出版 1965年 p.210)

「このように「かっこいい」ことやものが無批判的に受け入れられているということは、子どもたちが(おとなも同じなのですが)つねに何か変わったもの、変わったことに目をつけそれにぶつかって刺激を求めようとしているあらわれであります。」

(東京教育大学附属小学校道徳教育研究会、東京教育大学附属小学校道徳教育研究会編 『小学生の徳目観とその指導』 名辞図書出版 1967年 pp.50-51)

「「かっこいい」ということは、子どもたちがそうになりたい、という願望であり、「かっこいい」ものは、子どもたちにとっては、たまらない刺激のように思われます。」(東京教育大学附属小学校道徳教育研究会、東京教育大学附属小学校道徳教育研究会編 『小学生の徳目観とその指導』 名辞図書出版 1967年 p.50)

ただし、ある新しいものが、まさに「新しいもの」という位置づけで見いだされ、その身分において「かっこいい」と判断される場合は、その事物は、たんに既存の「新しいもの」の規範に適合するがゆえにかっこいいのであって、その事物がかっこいいゆえに、新しい規範が作りだされるとはかぎらない。逆に、ある古いものが「かっこいい」と判断される場合でも、新しい規範が作りだされることはありうる。ただ、既存の規範に適合しにくいという意味での新しいものは、(あたかも)自由な判断を提供しやすいという点で、結果上、かっこいいものに転じやすいと言いうる。

⁶² 「前述したように現代の消費者の中心=若者の欲望は多様化され、個性化されている。つまり、「カッコよさ」の要求である。この「カッコよさ」とは定型に対する反駁であり、他人のもっていないものへの欲望といってよい。」(竹田志郎「「感覚」的広告と需要創造-カッコよさが機能をしのぐメカニズム」『経済評論』20(1) 1971年 p.162)

⁶³ 「ひとがみな同じ感受性、同じ価値観でいるときにそのノイズとなること、いわば「はずし」の感覚、それが「かっこよさ」というものの本質ではないだろうか。人生の「はずれ」ともいえるべき貧しい存在が一アップの極致である芸者も、もとはといえば「はずれ」であり、不運から人生をはじめたひとが多かった—その「はずれ」という受け身の環境を「はずし」という能動的な姿勢へと裏返す。そこにファッションのひとつの極みがあるように思う。昔からひとが心意気とか意気地とやってきたのも、そういうライフ・スタイルのことだったのではないだろうか。」(鷺田清一『てつがくを着て、まちを歩こう』ちくま学芸文庫 2006年 pp.023-024)

いう意味でたえず余剰を生む営みであるとすれば、感性的判断の規範への適合は、それ自体がつねに不適合でもあると言いうるからである。つまり、感性的判断は、感性的質に自らを、託し、限定しつつ、同時に、そのことの中で、自らの個別化、差異化を果たし、積極的に感性的質を超越し、感性的質の変容をもたらす（感性的質の側から言えば、自身の限定性の内に、あらかじめ非限定性が含まれている）。

そうした視点から、語源上、適合性の表現の残響をききとりうる「かっこいい」を、積極的に自己超越に向かう感性的質の範例という位置づけで論究する余地があるであろう。そうした余地を見据えながら、同時に、「かっこいい」の特殊性、つまり、もろもろの感性的質のうちでもつ偏差を、たとえば「かわいい」との比較を通して、明らかにしたい。

参考にした辞典・辞書：

- ・中田祝夫、和田利政、北原保雄〔編〕『古語大辞典』第一版 小学館 1980年
- ・中村幸彦、岡見正雄、板倉篤義〔編〕『角川古語大辞典』初版 角川書店 1982年
- ・金田一春彦、池田彌三郎〔編〕『学研国語大辞典』第二版 学習研究社 1990年
- ・白川静〔著〕『字通』初版 平凡社 1996年
- ・日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部〔編〕『日本国語大辞典』第二版 小学館 2000-2002年
- ・白川静〔著〕『新訂字統』初版 平凡社 2004年
- ・白川静〔著〕『新訂字訓』初版 平凡社 2005年
- ・松村明〔編〕『大辞林』第三版 三省堂 2006年
- ・新村出〔編〕『広辞苑』第六版 岩波書店 2008年
- ・鎌田正、米山寅太郎〔著〕『新漢語林』第二版 大修館書店 2011年
- ・松村明〔監〕小学館大辞泉編集部〔編〕『大辞泉』第二版 小学館 2012年

古文文献リスト

	書名	年代	筆者	本文	出典
1	白氏文集	824	白居易(772-846)	【勉閑遊】時人事常多故。一歳春能幾度遊。不是塵埃便陰雨。若非疾病即悲憂。貧窮心苦多無興。富貴身忙不自由。唯有分司官恰好。閑遊雖老未能休。	岡村繁『新釈漢文大系』106、明治書院、2014
2	碧巖録	1125	圓悟克勤(1063-1135)	須念他拳一明三、拳三明一。你若去他三句中求、則腦後拔箭。他一句中須具三句、函蓋乾坤句・隨波逐浪句・截断衆流句、自然恰好。雲門三句中、且道、用那句接人。試辨看。頌曰、	末木文美士〔編〕『現代語訳碧眼録』上、岩波書店、2001
3	朱子語類(楠本本)	1270	朱熹(1130-1200〔講〕)、黎靖徳〔編〕	大戴禮、或有注或無注、皆不可曉。其本文多錯注亦錯。如武王諸銘有煞看題處、有全不着題處、或是當時偶有警戒之語。便隨處寫記不必恰好。不似今人爲某銘、須要做象本色。賀孫因學問數銘、可疑疑先生曰、便是如盤盪之銘。又恰好似可做船銘亦是。當時因見水而起意、然此等錯雜亦未可知	吾妻重二、秋岡英行、白井順、橋本昭典、藤井倫明〔訳注〕『朱子語類訳注』巻87-88、汲古書院、2015
4	杜詩統翠抄	1443頃	江西竜派(1375-1446)	【五原】八水対ニハ恰好也	大塚光信〔編〕『統抄物資料集成』1、清文堂出版、1980
5	蔭涼軒日録	1462	季瓊真築(1461-1469)〔1435-1466年の記録〕 亀泉集證(1424-1493)〔1484-1493年の記録〕	【寛正三年八月】三日 丹波國安國寺妙甫西堂。豊後國萬壽寺善濟西堂。公文御判被し遊也。瑞溪和尚引ニ額名或詩ニ被し獻也。撰ニ恰好之名ニ。重可し被し獻之由。被ニ仰出ニ也。	『蔭涼軒日録』史籍刊行会、1953-1954
6	足利本人天眼目抄	1471-73	川僧慧濟(-1475)〔講〕	瀉仰の宗旨は父子も上下も体用も恰好せでは叶まじいぞ	『日本国語大辞典』第二版、小学館、2000-2001
7	文明本人天眼目抄	1471-73	川僧慧濟(-1475)〔講〕	器と入れ物と恰好せではかなはぬぞ	中田祝夫、和田利政、北原保雄〔編〕『古語大辞典』第一版、小学館、1985
8	史記抄	1477	桃源瑞仙(1433-1489)	始皇本紀ノ賛ニ司馬遷力取テシタハ過秦論テ秦ノ事ヲ論シタホトニ恰好ナリ	清原業賢、清原宣賢ほか〔写〕『史記抄』京都大学附属図書館所蔵本、室町後期
9	古文真宝桂林抄	1485頃	桂林徳昌(1428-)〔講〕、一元光演〔聞書〕	【勝王閣序】今日ハ此ノ四美具リ、サテ、恰好シタ、適意ナル、實主對向セウテハソ、チヤカ今日ハ、ニ難モ并ノ	大塚光信〔編〕『統抄物資料集成』5、清文堂出版、1980
10	古文真宝彦龍抄	1490頃	彦龍周興(1458-1491)	文宗ト云唐一代ノ文ノ宗領ト云心也 作賛者多トモ仰之泰山北斗云カ恰好シタ	大塚光信〔編〕『統抄物資料集成』5、清文堂出版、1980
11	三体詩幻雲抄	1527頃	月舟寿桂(1470-1533)、月谷養雲	さて雲裾を服して華陽巾を載いては、歩行にてはもとより恰好せまいぞ…鶴の翅に乗て飛行したらば恰好せうぞ	中村幸彦、岡見正雄、板倉篤義〔編〕『角川古語大辞典』第1巻、角川書店、1982
12	中華若木詩抄	1533頃	如月寿印	屋簷ノ辺ニ。梅花ノ落テ。フカノハト。地上ニタマルヲ〔燕ガ〕見テ。サレバコソ。寒カリツル。シルシヲ見セタルハ。夜前雪ガ。降テマリタルト思也。題ニヨク恰好也。	小野正弘『漢語「恰好」の受容とその変容』『伝統と変容：日本の文芸・言語・思想』、ペリかん社、2000
13	中華若木詩抄	1533頃	如月寿印	日本ノ古歌ニモ。秋ノ夜ハ。月ニ心ノヒマゾナキ。出ルヲ待ト。入ルヲ惜ムト。此詩〔月夜移床〕ト恰好スル也。	小野正弘『漢語「恰好」の受容とその変容』『伝統と変容：日本の文芸・言語・思想』、ペリかん社、2000
14	中華若木詩抄	1533頃	如月寿印	後ノ人ハ。ソコマデ。分別モナクシテ。人ガヲイタ字ナレバ。我モツクナンド、云義勢アリテ。太不恰好コトアリ。可着眼。容易ニ字ヲ下タスベカラス。	小野正弘『漢語「恰好」の受容とその変容』『伝統と変容：日本の文芸・言語・思想』、ペリかん社、2000
15	四河入海	1534	笑雲清三〔編〕	白樂天がかうたたみて作ったが、その境とよう恰好なる程に、一倍面白いぞ	中田祝夫、和田利政、北原保雄〔編〕『古語大辞典』第一版、小学館、1985
16	四河入海	1534	笑雲清三〔編〕	此石ニ恰好ナルモノアリ此石ヲ盛ニ高麗ノ盆ヲ以テスルノサテ籍文登ノ海石ノ碎玉ノ如キヲ盆ニシテ此石ヲ置ソ	大塚光信〔編〕『抄物資料集成』3、清文堂出版、1971
17	四河入海	1534	笑雲清三〔編〕	セメテコレテナリトモモテナシ可申也 白芽薑ヲモ恰好ノ時分ニ故人相患也	大塚光信〔編〕『抄物資料集成』4、清文堂出版、1971
18	毛詩抄	1535頃	清原宣賢〔講〕	衰ハ盛衣服充耳ハ盛ニ飾ソ 衣服トカツカウセヌ心モチソ	大塚光信〔編〕『抄物資料集成』6、清文堂出版、1971
19	毛詩抄	1535頃	清原宣賢〔講〕	毛カ義ニハ徳ト服トカ恰好メ徳ノアル人ニ經衣カカツ好メ宜イホトニ	大塚光信〔編〕『抄物資料集成』6、清文堂出版、1971
20	毛詩抄	1535頃	清原宣賢〔講〕	帯モ冠モ其人の徳ニヨク恰好メ似合タリ	大塚光信〔編〕『抄物資料集成』6、清文堂出版、1971
21	八帖花伝書	1576-1592頃		大庭の舞台は、三間四方。廂は、その恰好成べし。	林屋辰三郎『日本思想大系』23、岩波書店、1973
22	八帖花伝書	1576-1592頃		中の舞台、二間まなか四方なり。是も、廂は其恰好なるべし。	林屋辰三郎『日本思想大系』23、岩波書店、1973
23	八帖花伝書	1576-1592頃		小庭の能などは、二間四方の舞台も、よく候。是も、廂は、其恰好、見合なるべし。	林屋辰三郎『日本思想大系』23、岩波書店、1973
24	八帖花伝書	1576-1592頃		御前の能は、少、様子変わるべし。板敷などの高さ、御見物所の恰好によるべし。	林屋辰三郎『日本思想大系』23、岩波書店、1973
25	八帖花伝書	1576-1592頃		座敷の前の舞台は、敷板の恰好、少座敷より舞台を高く、板敷を張る也。	林屋辰三郎『日本思想大系』23、岩波書店、1973
26	八帖花伝書	1576-1592頃		広き舞台・狭き舞台・長き橋掛り・中の橋掛り・短き橋掛り、それ〳の恰好、相応の仕舞のつもり・心持、肝要也。	林屋辰三郎『日本思想大系』23、岩波書店、1973
27	八帖花伝書	1576-1592頃		大夫つれに立つ人、大夫より背の高き人、つれに立ぬ物也。恰好悪しきものなり。	林屋辰三郎『日本思想大系』23、岩波書店、1973
28	山上宗二記	1588-90	山上宗二(1544-1590)	形りかっこう面白壺也	『日本国語大辞典』第二版、小学館、2000-2001
29	日葡辞書	1603-1604		【Cacco】カッカウ。(格好) Ataca yoxi.(恰好し) すなわち、Niyota coto。(似合うたこと)	土井忠生、森田武、長南実〔編訳〕『邦訳 日葡辞書』岩波書店、1980
30	大蔵虎明本	1642	大蔵虎明(1597-1662)	【かなづの地藏】〔仏を〕作る事ハなるまひほどにと存じて、かなぼうしを地藏になひてやらふずと思ふて、ちさうのかつこうを、かなぼうしがくらひに申た、	大塚光信〔編〕『大蔵虎明能狂言集 翻刻註解』下巻、清文堂出版、2006

31	大蔵虎明本	1642	大蔵虎明(1597-1662)	身共は御酒を一つたぶるほどに、夏は酒をひやしすまひてたもうず、冬はかんをしすまひて、馬にかつこうするほどのましてたもうず、	小野正弘『漢語「恰好」の受容とその変容』『伝統と変容：日本の文芸・言語・思想』、ペリカン社、2000
32	翁問答	1640	中江藤樹(1608-1648)	たとひ儒書にのする所の礼法をすこしもちがはず、皆とりおこなふといふとも、其おこなふ所、時と処と位とに相応適当恰好(ガウカウ)の道理なくば、儒道をおこなふにはあらず、異端なり	『日本国語大辞典』第二版、小学館、2000-2001
33	是楽物語	1655-1661		是楽が立出こそおかしけれ。〔中略〕其恰好はせざりけり。	渡辺守邦、渡辺憲司〔校注〕『新日本古典文学大系』74、岩波書店、1991
34	役者評判蛸艇	1674	今登之部羅坊	【出来嶋頼母】むらのなき目鼻のかつこうは春日の作の上郎面を見るやうにて	『日本国語大辞典』第二版、小学館、2000-2001
35	好色一代男	1682	井原西鶴(1642-1693)	【身は火にくばるとも】地顔素足の尋常、はづれにゆたかにほそく、なり恰好しとやかに、	暉峻康隆、東明雅〔校注・訳〕『新編日本古典文学全集』66、小学館、1996
36	役者口三味線	1699	江島其磧(1666-1735)	此君きりやうよく、身の取まはしりりしく、口上よく、年(トシ)が <u>かつこう</u> に合てはよくなさる	『日本国語大辞典』第二版、小学館、2000-2001
37	心中刃は氷の朔日	1709	近松門左衛門(1653-1725)	迎(むかひ)に來たは乳兄弟、かほかつこうは覚へね共	『日本国語大辞典』第二版、小学館、2000-2001
38	傾城禁短氣	1711	江島其磧(1666-1735)	是はふしんと早桶(はやおけ)に手をかけて見れば、かつこうよりかるし。	大阪府立中之島図書館所蔵本
39	百合若大野守鏡	1711	近松門左衛門(1653-1725)	此人の年かつかう、心立てはと問ひければ	『日本国語大辞典』第二版、小学館、2000-2001
40	歴代滑稽伝	1715	森川許六(1656-1715)	先師のはいかいは、人情平話のよく人に通じる辞、徒事にてなき事を按じ出し、むかしからの俳諧の形(ナリ)恰好に切ちよめて出したる物也。	大磯義雄・大内初夫〔校注〕『古典俳文学大系』10、集英社、1970
41	葉隠	1716頃	山本常朝(1659-1719)〔口述〕、田代陳基〔筆録〕	不恰好の時は、直り候迄幾度も言直し仕直し候様に成され候。	山村魏〔校訂〕『いてふ本 葉隠』上、三教書院、1937
42	岩淵夜話別集	1716	大道寺友山	乗物に乗て行くに、しかもせい恰好も揃た六尺が、跡先二人して担ぎ	『日本国語大辞典』第二版、小学館、2000-2001
43	世間娘容気	1717	江島其磧(1666-1735)	【互の恥を懺悔しらぬが佛見ぐるしい友達中】恰好より気のほそい男にて、あたまからがた／＼ふるふて	三浦理〔編〕『有朋堂文庫 八文字舎五種』有朋堂書店、1915
44	女殺油地獄	1721	近松門左衛門(1653-1725)	あいつが顔付せいかつかう成人するに従ひ、死なれた旦那に生写し	『日本国語大辞典』第二版、小学館、2000-2001
45	独寝	1724頃	柳沢淇園(1704-1758)	大きな印籠見苦し。すこしかつかうより小さきがよし	『日本国語大辞典』第二版、小学館、2000-2001
46	田舎荘士	1727	佚齋禱山(1659-1741)	長過たりとて、鶴の脛をよきほどに切りたらば、痛て死なむ、短しとて鬼の足を、能ほどに継たらば、苦しむでしばらく立ことなるまじ。是、足の恰好(かつかう)はよくしても、其自然に任せざれば、其用をなすこと能はず。	中野三敏〔校注〕『新古典大系』81、岩波書店、1990
47	柳多留	1765-1838	呉陵軒可有ほか〔編〕	つけ登せかつこうものにくらひこみ	前田勇〔編〕『江戸語大辞典』講談社、1974
48	金々先生栄花夢	1775	恋川春町(1744-1789)	こんどの若旦那は、とんと雷子がもの草といふかつこうだ	『日本国語大辞典』第二版、小学館、2000-2001
49	寸南破良意	1775	南鐮堂一片	【判頭株】〔判頭〕ム、久しい物だ。とうした〔おせつ〕いつそ。心持がわるい〔判頭〕瘡か〔おせつ〕エ、モ何ソの事だ。かつかうの悪い	高木好次〔編〕『洒落本大系』第二巻、六合館、1931
50	多佳余宇辞	1780	不埒散人	エ、かつかうの悪い、大錢一本半の所へ、小錢で二百とは、動遣る時に形りが悪い、二本棒にして行くと、大キにかつこうがゑいに	早川純三郎〔編〕『江戸時代文藝資料第一』國書刊行会、1916、
51	傾城買四十八手	1790	山東京伝(1761-1816)	【見ぬかれた手】部屋ざしきにしてはかつこうものと、きやくもそううに有て、めつたにお茶はひかず	中野三敏、神保五彌、前田愛〔校注〕『新編日本古典文学全集』80、小学館、1996
52	仕懸文庫	1791	山東京伝(1761-1816)	ホンニサ此ごろどやをしまつた新子かなんぞのやうに、このうちの前へも、恰好(かつこう)がわるふごせへす。	水野稔〔校注〕『新日本古典文学大系』85、岩波書店、1990
53	仕懸文庫	1791	山東京伝(1761-1816)	かつこうもんだ	大久保忠国、木下和子〔編〕『江戸語辞典』東京堂出版、1991
54	大蔵虎寛本	1792	大蔵虎寛(1785-1805)	【鬼がはら】此御堂(みだう)は格好のよい御堂じやに依て、逆(とて)もの事に此格かうに御堂をも建うとおもふ程に、汝もこゝかしこをどくと見覺へて置け。	笹野聖〔校訂〕『能狂言：大蔵虎寛本』上、岩波書店、1942
55	世諺口紺屋雛形	1799	曲亭馬琴(1767-1848)	ソレハねだんもかつこうものでござります	前田勇〔編〕『江戸語大辞典』講談社、1974
56	女子風俗化粧秘伝	1800	佐山半七丸〔選〕	髪の恰好にて髪結様の傳	国立国会図書館所蔵本
57	曆象新書	1802	志筑忠雄〔訳〕	故に若我地球、其廻轉の速力を増して、今の速力に十七倍するに至らば、赤道に當る諸體求心遠心兩力、恰も相適かるべし、忠雄曰、二百八十九の冪根は十七なり、地球廻轉の速力、今の速力に十七倍したりとせば、赤道に在て兩力恰好なるべし、	『文明源流叢書』第二、國書刊行会、1914
58	浮世風呂	1810	式亭三馬(1776-1822)	しみつたれな裁屋だから直は恰好だが、代物が少へはな。	神保五彌〔校注〕『新日本古典文学大系』86、岩波書店、1989、
59	浮世風呂	1810	式亭三馬(1776-1822)	魚が沢山で直が安し、女が美しくて恰好いふもんでござえますから	大久保忠国、木下和子〔編〕『江戸語辞典』東京堂出版、1991
60	浮世風呂	1811	式亭三馬(1776-1822)	背恰好(セイカツカウ)はすなりとして	『日本国語大辞典』第二版、小学館、2000-2001
61	浮世風呂	1811	式亭三馬(1776-1822)	あのネおむすさんのお髪は、今日のはまことに恰好(かつかう)がよいちやアございませんかねへ	神保五彌〔校注〕『新日本古典文学大系』86、岩波書店、1989

*【】、〔〕は春木による。引用文を記載する章・節・巻などのタイトルを適宜【】で補った。省略される語彙や注意書きを〔〕内に記した。